

大乘

DAIJO 法話

間にあう教え



兵庫・善教寺副住職

赤井 智顕

この「いのち」は、もしかしたら今日、最期さいごを迎える「いのち」かもしれません。事故という縁、病気という縁、災害という縁、私たちは生きるつもりをしていますが、「いのち」の事実は今日一日すら保証されていないのが現実です。しかし、ただ今の救いを説く浄土真宗の教えは、たとえ今日の「いのち」が最期だったとしても、必ず間にあうご法義であると教えていただきます。

以前、五十代のご夫婦が突然、お寺に訪ねてこられました。初めてお会いするご主人が私に向かって開口一番、「私はもうすぐ命を終えます」と話し始められたのです。驚く私に対して、さらに話を続けられます。

「実は今、病院で末期がんの宣告を受けてきました。途方に暮れて二人で歩いていると、たまたまお寺の看板が目に入ってきました。私は実家が浄土真宗であることは知っていましたが、恥ずかしながらこれまで真宗の教えを聞いたことはありません。いや、聞こうと思ったこともありませんか」

私はご本山からご本尊をお受けし、すぐにご夫婦のお宅を訪ねました。ご主人は医療器をつけられ、一日だけの帰宅を許されて戻っておられました。そのお姿は、以前とはずいぶん変わっておられました。もう起き上がることも、立ち上がることもできません。ソファーに横たわって、じっとこちらを見つめておられます。その中で入仏法要をつとめさせていただきました。

最後だと思われたのでしょうか、ご親族のみなさんや、関東で大学生活を送ってらっしゃるお嬢さんも帰ってこられての法要でした。おつとめの中、後ろのほうから声が聞こえてきます。

「主人の容態が急変し、おそらく病院から出ることがかなわなくなると思います。けれど主

ありません。しかし、自分の命の終わりが近づいていることを知って、一度、浄土真宗の教えを聞いてみたいと初めて思ったのです。どうか私に教えを聞かせてもらえないでしょうか」

切実なご依頼でした。阿弥陀さまというお慈悲の仏さまのいらっしゃること、葬儀のこと、これからのこと、いろいろなことをお話ししました。最後に「毎月お寺で法座を開いていますので、もしよければご一緒にお参りくださいませんか」とご案内したところ、ご夫婦そろって毎月の法座へお聴聞ちやうもんに来てくださいました。しかし、それから数カ月たったある日、奥さんから一報が入ります。

「主人の容態が急変し、おそらく病院から出ることがかなわなくなると思います。けれど主

「ナンマンダブ ナンマンダブ」と、ずっとお念
仏を称となえてらっしゃる、ご主人の小さなお声で
した。

おつとめを終え、阿弥陀さまのお慈悲のお心
をとともに聞かせていただき、私がある場所を立ち
去ろうと玄関へ向かっている時でした。

「ちよつと待つてください」と声が聞こえて
きたのです。パツと後ろを振り返りますと、両
脇を奥さんとお嬢さんに抱えられたご主人が、
こちらへ近づいてこられるのです。そして私の
前に立たれたご主人が、スツと手を差し出して
くださいました。温かい手でした。忘れられま
せん。私の手を握られたご主人がおっしゃいま
した。

「間にあいました。おかげさまで阿弥陀さま

のお慈悲に遇あわせていただきました」

涙があふれて声が出ませんでした。これがご
主人からお聞きした最後の言葉でした。その十
日後、ご往生のお知らせをいただきました。

浄土真宗の救いは、ただ今の救いです。「南
無なむ(まかせよ) 阿弥陀仏あみだぶつ(われに)」の仏さまは、
何時いついかなる状況にあっても、私のいのちの上
に「そのまま救う」と至り届いてくださってい
る大悲のおはたらきそのものです。この「いの
ち」ある限り、必ず間にあうご法義が浄土真宗
のみ教えであることを、あらめて教えていただ
きました。

ご主人の満中陰まんちゆういん法要の日、お嬢さんがほほ笑
みながら私に見せてくださいました。

「私の法名ほうみやうです。母と一緒に本願寺さんでい



カット 長井多美栄

ただいってきました。この法名は父の形見として、
これから大切に生きていきたいと思えます」

親鸞聖人は『浄土和讃』のなかに、

安楽浄土にいたるひと

五濁ごじよくあく悪世にかへりては

釈迦牟尼しゃかむに仏のごとくにて

利益衆生りやくしゆじやうはきはもなし

(註釈版聖典560頁)

とお示しくございました。阿弥陀さまのお慈悲
に抱かれ、お浄土の仏さまと成なられた方は、「南
無阿弥陀仏」のみ名と一つとなって、悲しみ苦
しみを抱いて生きる私たちを仏法へと導いてく
ださっているのです。深い別れの悲しみのなか
にあってなお、「南無阿弥陀仏」のお慈悲の温ぬく
もりは、今ここに届けられていました。